

# 歌占

季は 地は 予方 ツレ  
は は しテ 里人  
四月 加賀 幸菊丸 度会の何がし  
月 は 丸

「雪三越路の白山は。／＼。夏陰いづくなるらん。」

詞

「かやうに候ふ者は。加賀の国白山の麓に住居する者にて候。さても此程何処の者とも知らぬ男神子の來り候ふが。小弓に短冊を付け歌占を引き候ふが。けしからず正しき由を申し候ふ程に。今日まかり出で占を引かばやと存じ候。如何に渡り候ふか。歌占の御所望にて候はゞ御供申さうするにて候。」

シテ一声

「神心。種とこそなれ歌占の。引くも白木の手束弓。」

サシ  
「夫れ歌は天地開けし始めより。陰陽の二神天の街に行合の。小夜の手枕結び定めし。世を学び国を治めて。今も道ある妙文たり。」

歌

「占問はせ給へや。歌占問はせ給へや。神風や。伊勢の浜荻名をかへて。／＼。葭といふも蘆と云ふも。同じ草なりと聞く物を。所は伊勢の神子なりと。難波の事も問ひ給へ。人心。引けばひかるゝ

梓弓。伊勢や日向の事も問ひ給へ。日向の事も問ひ給へ。

ツレ詞「如何に申すべき事の候。

シテ「何事にて候ふぞ。

ツレ「さて御身は何くの人にて渡り候ふぞ。見申せば若き人にて候ふが。何とて白髪とはなり給ひて候ふぞ。

シテ「實にくく普く人の御不審にて候。是は伊勢の国二

見の浦の神職なるが。我一見のために国々を廻る。或時俄に頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。是も神の御咎めと存じ候ふ程に。当年中に帰国すべきとおこたりを申して候。

ツレ「さては其謂にて候ふな。さらば歌占を引き申し候ふべし。

シテ「やすき間の事一番に手に当りたる短冊の歌を遊ばさ

れ候へ。考へて参らせ候ふべし。

ツレ「承り候。教へにまかせ短冊を取り上げ見れば。何々北は黄に。南は青く東白。西くれなるの蘇命路の山。かやうに見えて候。

シテ「須弥山をよみたる歌にて候。是は父の事を御尋ね候ふな。

ツレ「さん候親にて候ふ者此程所勞仕り候ふ間。生死の境を尋ね申し候。

シテ「心得申し候。委しう判じて聞かせ申さう。夫れ

今度の所勞を尋ぬるに。辺涯一片の風より起つて。

水金二輪の重結に顯はる。夫れ須弥は金輪より長じて。其丈十六万由旬のいきほひ。四州常樂の波にうかび。金銀碧瑠璃玻瓈加宝の影。五重色空の雲に移る。されば須弥の影うつるによつて。南瞻部州の草木みどりなりと云へり。さてこそ南は青しとはよみたれ。こゝに又父の恩の高き事。高山

千丈の雲も及びがたし。されば父は山。染色とは  
風病の身色。しかも生老病死の次第を取れば。西  
くれなると見えたるは。命期六爻の滅色なれば。

あふ是は既に難義の所勞なれども。こゝに又染色  
とは。声を借りたる色どりにて。文字には蘇命路  
なり。よみがへる命の路と書きたれば。誠に命期  
の路なれども。又染色に却来て。一度こゝに蘇  
生の寿命の。種となるべき歌占の詞。頼もしく思

し召され候へ。

ツレ「あらうれしや。さては苦しかるまじく候ふか。

シテ「中々の事御心安く思し召され候へ。

ツレ「近頃祝着申して候。又是なる幼き人も占の所望に  
て候。

シテ「さてはおことも占の所望にて候ふか。以前の如く  
一番に手に当りたる短冊の歌を御読み候へ。

子「鶯のかひこの中の時鳥。いやが父に似ていやが父

シテ  
に似ず。

シテ  
「是も父の事を御尋ね候ふな。

子  
「さん候父を失ひて尋ね申し候。

シテ  
「是は早合ひたる占にて候ふ物を。

子  
「いや逢はねばこそ尋ね申し候へ。

シテ  
「さりとては占に偽りよもあらじ。鶯に逢ふ言葉の  
縁あり。又かひこの中の時鳥とも云へり。時も卯  
月程時も合ひに合ひたり。や。今鳴くは時鳥にて

候ふか。

子  
「さん候時鳥にて候。

シテ  
「おもしろしく。当面黃舌の轉り。鶯の子は子な  
りけり子なりけり。不思議や御身は何処の人ぞ。

子  
「伊勢の國の者。

シテ  
「在所は。

子  
「二見の浦。

シテ  
「父の名字は。

子 「二見の太夫度会の何某。

シテ 「さて其父は。

子 「別れて今年八箇年。

シテ 「さておことの幼名は。

子 「幸菊丸と申すなり。

シテ 「こはそも神の引き合はせか。是こそ父の何某よ。

子 「不思議や父にてましますかと。言はんとすれば白  
髪の。

シテ 「身は白雪の面わすれ。

子 「されども見れば我父の。

シテ 「子は子なりけり。

子 「時鳥の。

地 「程経て今ぞ廻りあふ。占も合ひたり親と子の。二

見の占方の。正しき親子なりけるぞ。實にや君が  
住む。越の白山知らねども。ふりにし人のゆくへ  
とて。四鳥の別れ親と子に。二度逢ふぞ不思議な

ツレ詞  
る。く。

「かゝる不思議なる事こそ候はね。さては御子息にて候ふか。

シテ詞  
「さん候疑ひもなき我が子にて候。是も神の御引き合はせと存じ候ふ程に。やがて伴なひ帰国せうずるにて候。

ツレ  
「近頃めでたき御事にて候ふものかな。又人の申され候ふは。地獄の有様を曲舞に作りて御うたひある由承り及びて候。とてもの事に謡うて御聞かせ候へ。

シテ  
「やすき御事にて候へども。此一曲を狂言すれば。神気が添うて現なくなり候へども。よしく帰國の事なれば。面々名残の一曲に。現なき有様見せ申さん。

地次第  
「月のゆふべの浮雲は。く。後の世の迷ひなるべし。

シテクリ  
「きのふもいたづらに過ぎ。今日も空しく暮れなん

とす。

地 「無常の虎の声肝に銘じ。雪山の鳥鳴いて思ひを痛ましむ。

シテサシ 「一生は唯夢の如し。誰か百年の齢を期せん。

地 「万事は皆空し。いづれか常住の思ひをなさん。

シテ 「命は水上の泡。

地 「風に随つて経めぐるが如し。

シテ 「魂は籠中の鳥の。

地 「開くを待ちて去るに同じ。消ゆる物は二度見えず。去るものは重ねて来らず。

クセ 「須臾に消滅し。刹那に離散す。恨めしきかなや。

釈迦大士の慇懃の教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の呵責の言葉を聞く。名利身を助くれども。いまだ北邙の煙を免かれず。恩愛心を悩ませども。誰か黄泉の責めに隨はざる。是が為めに馳走す。所得いくばくの利ぞや。是によつて追求す。所作

多罪なり。暫く目を塞いで往事を思へば。旧友皆亡ず。指を折つて故人をかぞふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今なんぞ渺茫たらんや。人とゞまり我行く。誰か又常ならん。

シテ  
「三界無安猶如火宅。」

地「天仙尚し死苦の身なり。いはんや。下劣貧賤の報に於てをや。などか其罪からんからん。死に苦しみを受け重ね。業に悲しみ猶添ふる。ざんする地獄

の苦しみは。春擣にて身を斬る事。截断して血狼藉たり。一日の其内に。万死万生たり。剣樹地獄の苦しみは。手に剣の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。剣樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは。両崖の大石。もろくの罪人を碎く。次の火煩地獄は。かうべに火焔をいたゞけば。百節の骨頭より。焰々たる火を出だす。或る時は焦熱大焦熱の。焰にむせび。或る時は紅蓮大紅蓮

の。氷に閉ぢられ。鉄釘頭をくだき。火燥あなた  
うらを焼く。

シテ「飢ゑては鉄丸を呑み。

地「渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量  
なり。餓鬼の苦しみも無辺なり。畜生修羅の悲し  
みも。我等にいかで勝るべき。身より出だせる科  
なれば。心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受  
くるなり。月の夕べの浮雲は。後の世の迷ひなる

べし。

シテ「後の世の闇をば何と照らすらん。

地「胸の鏡よ心にござな。

シテ詞「あら悲しや唯今参りて候ふに。是程はなどや御責  
め有るぞ。あら悲しやく。

ツレ「不思議やな又彼人の神氣とて。面色変はりさも現  
なき其有様。

シテ「五体さながら苦しめて。

ツレ 「白髪は乱れ逆髪の。

シテ 「雪を散らせる如くにて。

ツレ 「天に叫び。

シテ 「地に倒れて。

地 「神風の一揉もんで。 く。 時しも卯の花くだしの。

五月雨も降るやとばかり。 面には白汗を流して。  
袂には露の繁玉。 時ならぬ霰玉散る足踏は。 とう  
くと手の舞笏拍子。 打つ音は窓の雨の。 ふるひ

わなゝき立つゝ居つ。 肝胆をくだき神のおこたり。  
申し上ぐると見えつるが。 神は上らせ給ひぬとて。  
茫々と狂ひさめて。 いざや我子よ打ちつれて。 思  
ふ伊勢路の故郷に。 またも帰りなば二見の浦。 又  
も帰らば二見の浦千鳥。 友よびて。 伊勢の国へぞ  
帰りける。 く。